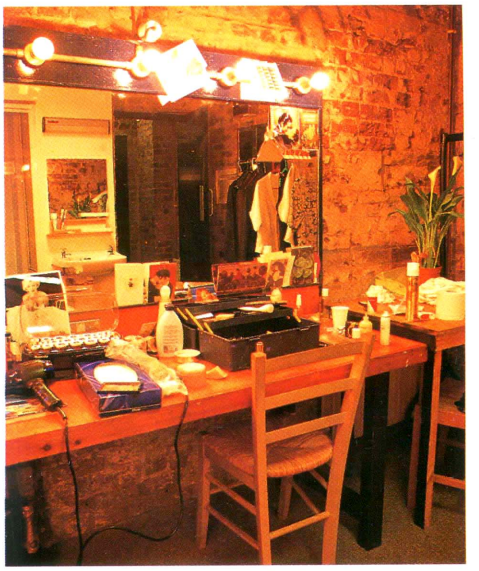
博したレイフ・ファインズやリーアム・ニーソンなどのパネル写真が飾られている

いまやイズリントンのランドマーク。アルメイダ劇場とカフェ



アルメイダには男性用、女性用、2つの楽屋しかない。ジュリエット・ビノシュもこの小さな楽屋を使用した

昨今、若いアーティストたちが移り住んでいるロンドン北東部のイズリントン。ここにはアンティーク・ショップや洒落たカフェ、レストランなどが建ち並び、東京でいえば白金台や代官山あたりの雰囲気を醸し出している。私の目指すアルメイダ劇場も白亜の邸宅風で、周囲と美しく調和していた。

もともと図書館、博物館、救世軍の集会所など、さまざまな用途に使われてきた建物が、客席数わずか300の小劇場に生まれ変わったのは'90年のこと。以来錚々たるスターがこの舞台に上がってきた。ジュリエット・ビノシュはフランスから、ケビン・スペイシーはハリウッドから。組合の規定から、どんなスターでも1週間の報酬は250ポンド(約4万円)。大劇場を擁する盛り場ウェストエンドからも離れているのに、この人気は何なのか？　そこには強烈な個性をもった共同芸術監督イアン・マックダーミッドとジョナサン・ケントの存在がある。

「私にとっていい舞台とは、かつてそこに集まった人々の夢や希望が残っているような空間であり、そういう場所には素晴らしい精霊が棲みついています。アルメイダには長い歴史に育まれた特別な精霊がいる。だから、みなここに魅了されるのでしょう」

そう語るジョナサンのこだわりは英国きっての名優、レイフ・ファインズを主演に迎え、今年3月から大人気となっている「リチャード二世」と「コリオレイナス」の舞台にも発揮されている。二人は過去に「ハムレット」で好評を博し（レイフはトニー賞受賞）、チェーホフの「イワーノフ」では本場、モスクワ芸術座での上演を果たしている。

もはやアルメイダでは収容できないほどのファンを持つこのゴールデンコンビに、ジョナサンはかつてアルフレッド・ヒッチコックが拠点を置いていた映画撮影所、ゲインズボロースタジオの廃屋を今回限りの劇場として選んだ。

「その場所を見てすぐさま亀裂の入った壁と稲妻を重ね合わせるイメージが湧きました。運命に切り裂かれる男をレイフに演じさせることを思いついたのです。しかも、そこにはヒッチコックというスペシャルな精霊もいる。場所が演目を呼んだのです」

シェイクスピアの戯曲は眩暈がするほど台詞が多いが、今回、ジョナサンは半年にわたる公演期間中、2作品の同日公演の日を設けるなど、俳優たちに過酷な挑戦をさせている。解釈がまた独特で、一般的に悲劇とされるこの2作品に喜劇的な色合いを強めているのも興